

「第4回 くまもと戦争遺産の旅 ～天草海軍航空隊、本渡空襲と軍人像をめぐる～」

7/15版

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 代表 高谷和生

1 はじめに ～戦後78年の諸相、見学会に向けて～

- 第1・2回は、歩兵十三聯隊、合志市黒石原奉安殿、菊池飛行場とミュージアムを見学
- 第3回は、初の天草方面で天草海軍航空隊、米国海兵隊撮影の戦後接收新発見写真 等
- 熊日新聞主催「戦後70・75年企画 くまもと戦争遺産をめぐる旅」を企画
- 「学ぶ旅」のあり方、戦争遺跡の学びは…
- 「ウクライナ戦争」の現実を見て…
- 一人ひとりが戦争遺跡・遺産と向き合い「語り手」「継承者」として「平和を語り継ぐ」
- 「くまもと戦争と平和のミュージアム（仮）」設立に向け

2 熊本の戦争遺跡・遺産

(1) 戦争遺跡とは

- 全国の戦争遺跡は「約50,000」件、指定登録は「341」件
2022年8月現在
- 熊本県内の太平洋戦争期の戦争遺跡総数は、多数の特殊地下壕を含めた「723件」
- 『くまもとの戦争遺産』内の一覧表記載、本会HP上には「249件」を精査し記載 2023年1月10日現在
- 熊本県内の指定登録文化財は国148件、県383件、市町村3,382件、国登録文化財156件の計2,382件



①第1回戦争遺産の旅 菊池市指定文化財「花房飛行場給水塔」前で

(2) 西南戦争期の指定等

西南戦争遺跡群（国指定、熊本市・玉東町）、明德官軍墓地（熊本市）、七本官軍墓地（熊本市）、花岡山陸軍埋葬地（熊本市）、旧輜重兵六聯隊衛兵所（熊本市）、有栖川の宮御督戦の地（玉東町）、篠原国幹戦傷の地（玉東町）、城の原官軍墓地（南関町）、肥猪町官軍墓地（南関町）、陣内官軍墓地（水俣市）、下岩官軍墓地（和水町）、高瀬官軍墓地（玉名市）、田浦官軍墓地（芦北町）、峰崎官軍墓地（芦北町）の計14件 ※県全域悉皆調査は、未実施

(3) 太平洋戦争期の指定等

「花房飛行場給水塔」（陸軍菊池飛行場高架水槽・菊池市指定有形文化財）、「永山の掩体壕」（陸軍人吉秘匿飛行場木製有蓋掩体壕・球磨郡あさぎり町登録文化財建造物）の2件。また、合志市の「黒石原飛行場奉安殿」は、保存修復事業を進めており、完了後に合志市指定文化財となる予定である。 ※地域の歴史を語るうえで「重要な遺跡」との認識

(4) 熊本の「戦争の歴史」をたどる ※戦争遺産ガイドMAP

※平和啓発リーフレット『進駐軍の見た熊本』『進駐軍の見た熊本 II』『菊池の空から II』
～熊本に残された戦争の傷跡「七大特徴」～

- ①軍都熊本市の軍事施設
～熊本城から東部の大江・渡鹿地区への軍施設の移転～
- ②九州で三番目に多い陸海軍飛行場
～正規飛行場、本土決戦に向けての特攻秘匿飛行場～
- ③東京第二陸軍造兵廠荒尾製造所
～軍直営で石炭を原料とした黄色火薬の生産～
- ④三菱重工業熊本航空機製作所と学校工場・地下工場
～陸軍四式重爆撃機「飛龍」の生産～
- ⑤本土決戦に向けての天草地区砲台、震洋等の特攻艇基地と兵站基地としての人吉地区の飛行場・地下工場・地下壕群
- ⑥県内各地に残る空襲・戦災の「被害の歴史」
- ⑦朝鮮人や中国人、連合軍軍俘虜労働者、敵機捕獲搭乗員への「加害の歴史」



②第3回戦争遺産の旅 天草海軍航空隊「スリップ」跡での見学様子当日は大潮干潮時で、スリップ側面の擁壁が露出、基礎の松材や敷設コンクリートパネルが確認できた。

3 本渡・楠浦空襲と墜落米軍機

※平和啓発リーフレット『空襲下の熊本』

(1) 空襲を受けた楠浦の「熊本造船所」

天草郡楠浦村掛場に、「1941（昭和16）年、株式会社熊本造船所が立地した。当初は、八代で開所予定であったが、肥州窯業株式会社及び南九州窯業株式会社の土地を買収し、塩浜跡地などを含め海岸を埋め立て、翌年工場用地が竣工した」（株）熊本造船所大門工場は、昭和18年に国から軍需用木造船建設（木造輸送船）の指定を受けた。従業員は、最盛期には600人を越えていた」という。『楠浦町誌』より

『大凡荘夜話』によれば「木造船会社としては全国の七大造船所の一つに数えられるほど大規模なものであり、150～300トンを建造する造船台5台」があったとされる。

また、**刃田千穂美さん証言では、「熊本造船所への空襲は2回あり、2度目は爆弾と機銃掃射の攻撃で、社屋・工場建物が焼けて隣接する自宅にも火の粉が降ってきた。その折りに隣の借家に住んでいた阿蘇出身の「山口さん」のご主人（当時45歳前後・フルネームはわからない）が機銃掃射で被害にあい、亡くなられた。丁度お盆の前日（8月14日）のことだったので、良く覚えている。終戦間際の事で、葬式があった記憶もない。何時のまにか奥さんは転居された。山口さんの奥さんは「墜落した米兵を一度竹やりで突かせてほしい」と懇願されたが、それはかなわなかったという。さらに空襲資料として、本渡歴史民俗資料館に「船舶内ベッド板」に12.7mm機銃弾の貫通痕跡資料が保管されている。**



③ 熊本造船所初の木造戦時標準船進水式 『大凡荘夜話』より

(2) 墜落機体及び墜落機搭乗員

- 墜落機体：North American 「P51」 Mustang
- 搭乗員：**CHAELES. L. BURMAN (ブルマン) 中尉**
楠浦村字実ヶ浦（さねがうら）共同墓地埋葬
- 所属部隊：**第5航空軍第5戦闘機集団第35戦闘機群団第40戦隊**
- 機体番号：44-63335
- 墜落日：1945年8月14日午前11時頃
- 墜落地：**熊本県天草郡楠浦村（現・天草市楠浦町：くすうら）大字舟津（ふなつ）海岸沖**
※POW研究会「本土空襲の墜落米軍機と捕虜飛行士」より



④ 欧州戦線のP51D型機

(3) 墜落の「P51・マスタング」機

P51マスタングは「第2次世界大戦中に開発された米軍戦闘機で、最も完成度の高い機種とされる。全長9.8メートル、全幅11.3メートルのコンパクトな機体に、離昇出力1490馬力のパッカー・マーリン液冷V型12気筒エンジンを搭載、最大で時速703キロというレシプロエンジンでは極限のスピードを実現した。空気抵抗の小さい層流翼を採用、空力的に洗練されたボディで、さほどパワーの大きくないエンジンにもかかわらず、高速と強い上昇力、さらに最大3700キロという長い航続距離を実現した。戦略爆撃機の長距離護衛からロケット弾を搭載した地上攻撃まで幅広い任務をこなし、各型合計でおよそ14800機が生産された」

時事通信社の「米空軍機」より
沖縄移駐の陸軍部隊に装備された機体はD型機で、これは高々度性能向上のためロールスロイス社V-1650-7エンジンに転換したもので、併せて課題となっていた後方視界について、コックピット後部胴体を低くし、新たにホーカータイフーンで採用されていた枠の無い水滴型キャノピー（バブルキャノピー）を取りつけた機体である。また装備は12.7mm機関銃を増設し、計6丁の機関銃を主翼に装備していた。また対地攻撃用HVARロケット弾も翼下に装備

(4) 第5戦闘機集団第35戦闘機群団第40戦隊と墜落機

米軍が沖縄に上陸して以降、日本軍の組織的抵抗が終わる前から米軍側は旧日本軍飛行場を直ちに整備し、6月には本格的に米陸軍極東航空軍が移駐を開始。

極東航空軍は、第5・7航空軍から成り、所有する戦闘機のタイプ別（P38・P47・P51）に8個群団を構成していた。墜落機はP51で編成された「**第5航空軍第5戦闘機集団第35戦闘機群団第40戦隊**」所

資料②：国立国会図書館デジタルコレクション

「Operations against Kyushu targets during July and August 1945」より

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/4009325> 54コマ目、55コマ目

SORTIES & TOP				BOMBERS				GENERAL TARGETS			
DATE	GROUP	TOP	A/C	TYPE	NO.	TYPE	NO.	TYPE	NO.	TYPE	NO.
Jul 5	40th	16	anno	Kyushu-4 A/B (George) dest.	4335 (50) expended.						
Jul 16	"	4	anno	Isumi-6 barges damaged, 3500 (50) expended.							
Jul 16	"	4	anno	Kashima Kawan-2 barges, 2 SAs damaged, 3320 (50) expended.							
Jul 17	"	15	3.75	GP bomb, 1 lugger damaged, 1500 (50) expended.							
Jul 17	"	7	3.50	GP bomb, 1 lugger damaged.							
Jul 18	"	4	anno	Kashima-9 trains dest.	52-0 (50) expended.						
Jul 29	"	14	anno	Kagami-16 trains dest.	5790 (50) expended.						
Aug 5	"	14	3.5	GP bomb-Dynaco report.							
Aug 5	"	15	3.9	Frags - Isumi - 2 SAs damaged.							
Aug 7	"	17	anno	Kurita-10 trains dest.	4515 (50) expended.						
Aug 7	"	14	3.5	GP bomb Tatsushiro - 1 hvy bridge dest. 5 trains dest. 1975 (50) expended.							
Aug 12	"	4	anno	Abrakata - 2 SAs damaged, 6190 expended.							
Aug 12	"	3	anno	Tamatsuka - 1 train, 3 vehicles dest. 4975 expended.							
Aug 14	"	16	4.	GP bomb SE of Hori - 4 SAs damaged, 6600 expended.							
Aug 14	"			TOTALS	147 sorties; 25.25 tons of bombs; 52160 ammo expended.						

SORTIES & TOP				BOMBERS				GENERAL TARGETS			
DATE	GROUP	TOP	A/C	TYPE	NO.	TYPE	NO.	TYPE	NO.	TYPE	NO.
Jul 5	40th	16	anno	Kyushu-4 A/B (George) dest.	4335 (50) expended.						
Jul 16	"	4	anno	Isumi-6 barges damaged, 3500 (50) expended.							
Jul 16	"	4	anno	Kashima Kawan-2 barges, 2 SAs damaged, 3320 (50) expended.							
Jul 17	"	15	3.75	GP bomb, 1 lugger damaged, 1500 (50) expended.							
Jul 17	"	7	3.50	GP bomb, 1 lugger damaged.							
Jul 18	"	4	anno	Kashima-9 trains dest.	52-0 (50) expended.						
Jul 29	"	14	anno	Kagami-16 trains dest.	5790 (50) expended.						
Aug 5	"	14	3.5	GP bomb-Dynaco report.							
Aug 5	"	15	3.9	Frags - Isumi - 2 SAs damaged.							
Aug 7	"	17	anno	Kurita-10 trains dest.	4515 (50) expended.						
Aug 7	"	14	3.5	GP bomb Tatsushiro - 1 hvy bridge dest. 5 trains dest. 1975 (50) expended.							
Aug 12	"	4	anno	Abrakata - 2 SAs damaged, 6190 expended.							
Aug 12	"	3	anno	Tamatsuka - 1 train, 3 vehicles dest. 4975 expended.							
Aug 14	"	16	4.	GP bomb SE of Hori - 4 SAs damaged, 6600 expended.							
Aug 14	"			TOTALS	147 sorties; 25.25 tons of bombs; 52160 ammo expended.						

⑤ 第40戦隊戦闘報告（抜粋） 国立国会図書館所蔵

属機である。

この第40戦隊の8月戦闘報告では、攻撃地点は鹿児島県油津、宮崎県富高、熊本県八代、鹿児島県栗野」等で、GP爆弾及び機銃掃射による攻撃、**8月14日は「Honda（本渡か？）海へのGP爆弾と6600発の機銃掃射」**が行われた。

また**8月14日の項には、該当機が「対空砲火を受けて水面へ墜落」**したと記載されている。

(5) 墜落機資料

墜落地点に隣接した共有管理地「**五色島（こしきじま）**」の松の木に、**墜落機破片が突き刺さり、その後この資料を楠浦コミュニティセンター（旧楠浦公民館）で保管されている。**金属片は「**リベット留めジュラルミン製部材片**」で、約10cm方形。表面には焼け焦げた跡やめくれ破碎した状態が見え、墜落時の衝撃の激しさを感じさせる。部材は平面状で、端部形状も確認できるが、機体部位の特定には結びつかない。本資料を公民館に寄贈した方・経緯を調査中。



(6) 証言等による墜落情況、米兵の埋葬、墓地部隊による遺体引き取り

- ①「佐伊津（さいつ・天草市本渡・墜落地点まで約6km）の天草海軍航空隊からの高射砲か、志柿港（しがき・天草市志柿・墜落地点まで約5km）に停泊していた艦船の機関銃に撃たれて、**「攻撃は南側かだったが瀬戸海峡の間をフラフラして落ちてきた」「機体は北から飛んできて、五色島の手前の海に落ちた」**
- ②墜落地点は、五色島と船津港の間で、水深が深かったことから、船津の漁師が網を打って機体は蛭子の浜（えびすのはま）海岸に引きあげた。また、乗員遺体も操縦席から網であげた。**墜落機には「操縦席に遺体はそのままあり、大きな損傷はなかった」。**墜落時に港停泊の船舶のマストに機体を引っ掛け「水平尾翼」が現地に落下した。その部品は近くの防空壕内に置かれていたが、鉄材として売られた。
- ③「米軍機の遺体は、蛭子の浜（えびすのはま）海岸にあげ、その後村の縁故者のいない者対象の**共同墓地・向山（むこうやま）実ヶ浦（さんねがうら）に埋葬した**」「翌々年、進駐軍将兵3人が訪れた際には、仏式の回向の儀式として、埋葬地を結界し蠟燭や香花をたむけお経をあげると米兵は感動した」「米兵は当初シャベルで掘ったが、遺体が傷つかないようにほとんど素手で丁寧にあつかった」
- ④進駐軍が遺体を引き取りにきた時、その様子を見に行った。米兵は4～5人おり、**「村長をはじめ村幹部は10名ほどおり、紋付き袴の姿で対応した」**、「当初米兵は、ピストルを抜き威嚇していた」「実ヶ浦（さんねがうら）の無縁墓から遺体を掘り起こし、米兵は担架に乗せられ、里道を通り村の巡査の家に一旦運ばれた」
- ⑤宗心寺の横に、ジープに乗った米兵2人が遺体回収に来た。怖かったが、近くで見ていると**大柄で背の高い米兵が遺体の入った「大きなリュック（遺体回収袋か）」を両腕に通し、「ヒョイ」と軽くかかえて、それをジープに乗せた。**
- ⑥戦後2年程経った頃、ジープに乗った青色の帽子をかぶった米兵2人が、下浦小学校を訪れ、授業の様子を見にきた。「墨塗教科書の様子を確認にきた」「楠浦（墜落機米兵の遺体回収時か）から回ってきた」と、後で大人から聞いた。

⑥「五色島の松」に刺さった墜落機体のジュラルミン片

(7) 楠浦空襲は本土決戦に向け「楠浦の軍需工場等を含めた本渡全域への攻撃」である。

(8) 本渡空襲での紙の爆弾「伝単：でんたん」投下

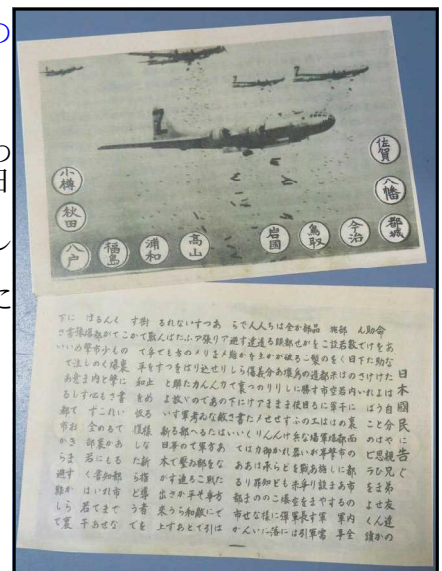
- 伝単（でんたん）とは「戦時において敵国の民間人、兵士の戦意喪失を目的として配布する宣伝謀略用の印刷物（ビラ）。その語源は物事を伝える紙片という意味の中国語」である。**情報戦でのプロパガンダリーフレット**である。

- 「第二次世界大戦では、各国とも数千万枚とも数億枚ともいわれる伝単を印刷し、飛行機を用いて広域に散布」している。「日本上空の制空権を握ったアメリカ軍は、連日B-25爆撃機等で、空襲の目標となる都市に**大量の「空襲予告」宣伝ビラ**を散布した。これを拾った者は憲兵や警察へ届けることになっていたが、「**確実な予告ビラであり、リアリティに富み、日本の民衆心理に効果をあげた**」という。

- 県内では、これまでに**熊本市3種と天草市2種での「伝単5種」**が確認されている。

- 投下された現物資料は、熊本日日新聞社新聞博物館所蔵「3点」である。

⑦ 日本本土に落とされた「伝単・日本国民に告ぐ 第1回目投下資料」 高谷和生所蔵



- 天草市杵宇土（はじうと）町の井上善徳氏証言。「終戦間際で米軍小型機から杵宇土集落に投下された。全て拾って役場に届けた。また、近隣の方の証言では、その後は役場から回収に訪れたとのことである。チラシには「チャーチルか眼鏡をかけた米国人の顔写真」があったとの証言から、投下伝単は「トルーマン伝単」と想定される。
- 天草市本渡町の本多裕子氏証言。牛深町二浦の早浦湾で国民学校6年生の時に、「米兵とロシア兵が日本列島を軍靴で踏みつけている写真のビラを拾った」との証言を、長男の本多康司氏が伝え聞いた。ソビエト連邦の日本参戦を伝える「感激の握手」伝単と想定される。

⑧ 米大統領トルーマンの写真が記された「日本国民諸氏 ツルーマンより一書を呈す」伝単 同型資料

高谷和生所蔵



4 天草海軍航空隊、米海兵隊撮影の新発見写真

(1) 天草海軍航空隊基地跡

天草海軍航空隊は天草市佐伊津に所在する。「佐伊津・御領」飛行場の別称があり、水上機専用の飛行場である。旧通信省天草地方航空機乗員養成所（海軍系）として、開所準備が完了したところで、全施設を海軍が接收。昭和19年3月に第十二連合航空隊博多海軍航空隊天草分遣隊として当初は整備教育隊として発足したが、その後は水上機操縦の教育も行った。昭和17年頃より地元中学生や住民の勤労働員、徴用された朝鮮の人々も建設に投入された。

その後昭和20年3月1日、天草海軍航空隊として独立、第5航空艦隊第12連合航空戦隊に編入。保有機は米軍への引渡目録によれば九三式水上中間練習機36機、九四式水上偵察機3機、九五式水上偵察機15機、零式水上観測機7機、二式水上戦闘機3機の計64機であった。

5月5日練習航空隊の指定を解き、第5航空艦隊第12航空戦隊の所属となった。昭和20年の沖縄戦においては第一次攻撃隊が5月24日2機、第二次攻撃隊が6月21日に5機、7月3日に1機の零式水上観測機での特攻作戦を実施し、計8機・16人が特攻死されている。本部跡の高台には、沖縄作戦で亡くなった隊員の「特攻慰霊碑」が戦後まもなく結成された「天空会」により、1973（昭和48）年に建立されている。





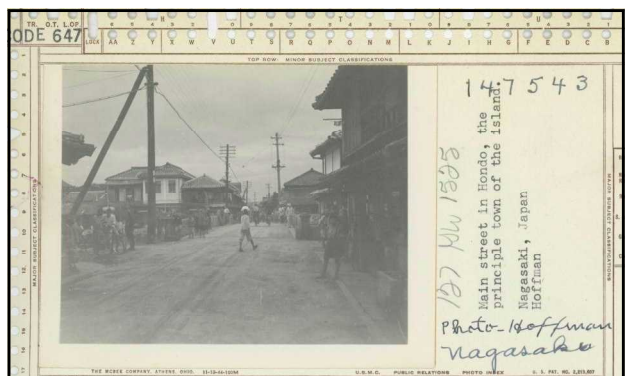
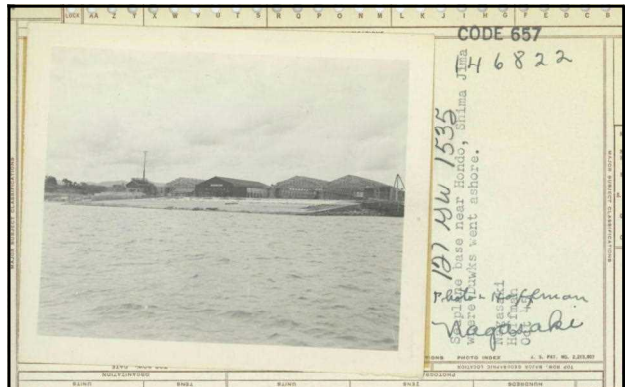
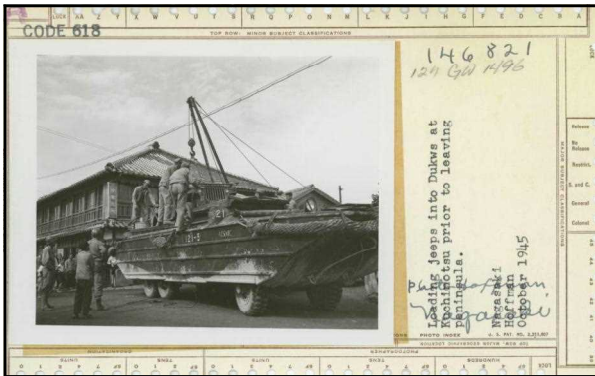
- ⑨戦闘指揮所前に集合した搭乗員と零式水上偵察機
 ⑩本部前での集合写真 ⑪6月21日特攻隊出撃の水壺
 以上3点は、天草アーカイブス所蔵
 ⑫旧天草海軍航空隊跡に建立された「慰霊碑」
 ⑬水上機滑走台「斜路」側面部 ⑭地下発電所壕の内部

(2) 撮影概要と接收状況

天草地区撮影資料21枚の内訳は、本渡町内2枚、天草海軍航空隊11枚、富岡水尻砲台4枚、鬼池・四十七耗砲各1枚である。ただし⑩天-2は、天草下島渡海前の長崎県南島原市口之津町での1945年10月18日の撮影である。島原鉄道口之津駅前・林田旅館前での撮影で、当時波止場の前でもある。早崎海峡は全4.2km、当時の「機帆船（880ト程度）」で、約40分程度で対岸の鬼池港まで達していた。海兵隊水陸両用車（DUKWS・通称“アヒル”）に、附属の起重機を使い「半島を離れる（渡海前）にジープを搭載」している様子である。

天草海軍航空隊に関しては、⑩天-3は天草海軍航空隊施設の全景を写した初めての写真で、しかも海からの貴重なカットである。現存するスリップ状況、格納庫4棟の配置と併せ前線指揮所構造等も理解できる。⑪天-5の格納庫内への零式水上観測機接收前状況写真に代表される様に、これら飛行機部品等接收前状況の一連写真は貴重である。アジア歴史資料センター蔵『天草海軍航空隊引渡目録』との突き合わせ作業で、一連の米軍接收作業状況が想定できる。

また、⑩天-8は、本渡町の当時様子である。



⑤島原口之津駅前・林田旅館前での海兵隊水陸両用車「DUKWS」に搭載されるジープ

⑥「天草海軍航空隊基地」海からの全景

⑦格納庫内収納の「九五式水上偵察機（アマー22）」

⑧天草市本渡の「町山口川と本渡橋」の様子

5 天草地区の個人慰霊「軍人像」

(1) 軍人像とは

軍人像とは、明治以降の近代戦争で亡くなった軍人を慰霊・顕彰する目的で製作・設置された像である。

戦争遺跡研究会清水啓介氏の設置形態を基にした分類では「**個人慰霊軍人像・個人顕彰軍人像・集合軍人群像**」の3分類がなされている。また、軍人像材質は「屋外建立では銅製・コンクリート製・石製で、屋内安置は木製」であり、個人慰霊軍人像は「父・母・兄等遺族による建立が全てで、設置場所は墓地や個人敷地内が多い」、個人顕彰軍人像は「建設会や顕彰会等団体による建立が多く、神社や寺院境内が多い」ことが確認されている。

また、古来より「武運長久を祈る神」が、近代で「武勲を立て勇敢に戦死した軍人が神格化」した「軍神像」とは区別する。先の清水啓介氏の愛知県中心とした2016年段階での調査・分類では「個人慰霊軍人像34体、個人顕彰軍人像56体、集合軍人群像12群」が確認されている。

(2) 山崎（福江）家軍人像 ※本形式を「**栖本型・I類**」と仮称する。

天草市栖本町湯船原1055番地の円性寺墓所軍人像のデータを紹介する。

□像名：**陸軍歩兵 福江喜八**

□石材：**凝灰岩製・天草御領産**

□装備：陸軍軍衣、三八式歩兵銃、前ごう、後ごう、背のう、飯盒、雑囊、剣差 他

□規格：全高：146cm、全幅50cm

□台座形状：石垣風台座・方形台座・琴柱型台座

□台座高：158cm、低台座幅120cm

□戒名：念譽報国義忠居士

□**石工名：下浦石場 石工 松下平太郎**

□墓所管理の山崎豊氏証言では、「平成4年6月の墓所整備の折に、隣接する福江家墓所・軍人像を山崎家墓所内に囲み整備」したとの事である。さらに、「福原家軍人像」は隣接で設置

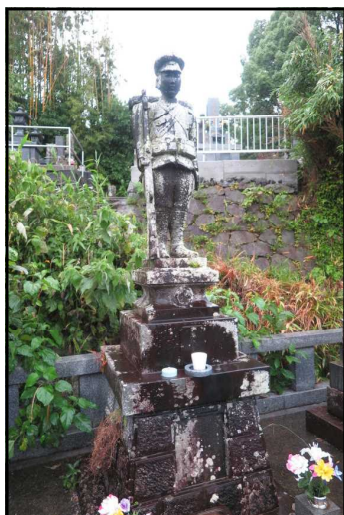
□銘板：風化のため判読不能

□備考：天草市下浦町の松下忍氏（現松下石材店代表）証言で「本像の石材は御領から石を持ってきた。下浦の自宅で祖父平太郎が製作した」と聞いている。

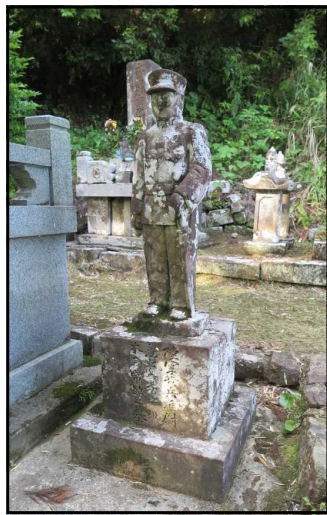
(3) 熊本県内事例と下浦石工 ※2023年7月14日現在

熊本県内個人慰霊軍人像事例では、天草市栖本町5体・同市河浦町1体、上天草市龍ヶ岳町大道1体に「**計7体**」が確認されている。また、上天草市松島町・大矢野町に3体、天草市杵宇土町に1体、人吉市城本町に1体、芦北町肥薩オレンジ鉄道沿線に1体、八代市泉村に3体の「**計9体**」の軍人像所在情報がある。さらに県内での詳細調査が必要である。

熊本県内には、通潤橋を造作した種山石工をはじめ、多様な石工集団が所在する。ここ天草では下浦町に、「**加工しやすい砂岩と良港に恵まれた**」ことから、**およそ300年の歴史を有する「下浦石工」の集団**がある。19世紀以降は、下浦産砂岩の需要が急速に高まり、建築資材として社寺の参道敷石の提供が行われ、それは本渡「祇園橋」で結実する。本軍人像の幾つかは、下浦石工集団による造作による物であると想定される。



①栖本町「山崎（福江）家軍人像」



②河浦町「本多家軍人像」



③龍ヶ岳町「太田家軍人像」